扶桑

近代絶倫者

三

へ13
3265
3

3265
3

近代艶隠者

巻三

同線

一 桁もゑれ木の束　都つま文婦
二 袖み冨乃菅　嬲嫌風流男
三 石菊ハんれ廣庭　四川仲乃隠者

福田文庫

四 便ハ現乃文　まうそうの尼

五 和歌ハ風俗　雑俗の部

都ハつまの文婦

ものすきなるもの浮世うつり替りて変化のつまより
打ひなぐ〻玄斗とた面の暮方加賀乃助長岡よ世し
蹴ハ揚と春蝶よろゝ河漏和にて心もいきまでげな雷
こそ〻ぞ〻くけ和もて世ハ和をと霞ハ和多の
徒行にとせんと思ひさ〻と橋がゝき度ハ中を立ハ志
てり四となくハ河漏せ安りに時ハ花咲比揚よ吉
遭かハ世さ〻ま席を付て四女者ハあ〻ひてそ正
揚ゞ下に度の徒〻て揚ゞよ景たゞに見てのゝあ
んなハ和とりん幸とたゞ〻なゞ詩ふ〻ろ〻を
のべ歌ハ思ひを揚ゞに無ゞ囲碁よあ〻ゝ思

ひくれば酒業音曲を耳に満て、さも打言葉
にのべがたくもあらず。又あるは打ちつれ酒
しき男女の多くあるは如ふ湯單包をとりそなへ藤棚の
きさらげなる岩間づたへふ青月黄乃席をしつらへ
まもりしらとあるは和ふ唐て行筒よりの酒を飲
酔をすめるあり彼くるさまを晴へて接待女にとりそな
し包物を開てちいさき春ほそやう成枠をとれ
二人の年ちらげなるがまつ水を波火をきりなどし
てあるうれ黄菓拾つ煩揚つ皆にを是よりて
たいぬき発ひらちらげよ食ふ飲ひくふ角は先より
ひんまへすなにぶなるぬくるあるとなづく化成仕業

乃こうあるしいうなまだ切れすきなきをれ切乃ま
さるを捨うあ身を労しなまとろうよ男憂へる
けしき有て毎ふ道しゆくこそあきなれかなし
きかなと嘆しうあ色もてあげて云ハ今花陰
乃賓客農味酒肴をうのへ膳板菓をたくあ
春興をうこへども海こうの天未をもしぶ人間上下岸
る悲のうぬき事ハ皆々成業なり誠よこまを
いうれで年自事を視て食ふ時ハ彩ひうぐけどもんハ
ちまうず心ちまれで補毒し神安き晴ハ何まう
悲へうんうまいなきを価と云世れ労をぬすまぶ毒
憑乃去ハ世れ労をぬすむこれ少へみ彩ハ静なれハる

心動く。こゝろうごけば氣さわぐ。氣さわぐ時は
神安からず。かゝる何国を楽といふや。世を偽り
て富貴を求め。謀りごとを巧みに禄をたくはふるは氣を
惑ふ所なり。あたにあらず。自国ゝへ自滅む
自然の道なり。欲よりは労なくつまに恐なし。
労となく恐もなければ自然に天楽あり。てんらく
とは言ふべからざるものい。求ハ悲あるいハ悔。求ハ憍けるなり
世をとゝのゝ事あんん。我世に無懐なくたゞもむ
事不安なり。悲しきこと云事を言ふべ。意をなの是
下れてこゝろやと云に。いかゝ心なるこゝと同
なり。あさはゝこゝとまるへ。浅くうゝ。憑とゝ心ハ邪を捨
て内を浄め。外を言ふべ。浄して内を知ハ内の道をかざ
らずして天性を守なり。実にかへれ。世俗よ
交る拙。外仰ようたのまれ。ようたのまれよ。
と同て。浄外乃隠士と巷に遊ハ
ありなり

二　濃艶の風流男

卯月のなごめ青葉乃蔭ことなつかしく燒餓の方
もゝ掛ものゝ上の間の靜なる所和ふ幕張まゝ
祿乃被紙の纏をめゝ笠殘る垂物ふりかゝを
わゝむ家めゝとさよりて見まゝ内みゝと人とおぼし
きゝ人乃中伊達と威儀もかゞり結ひを惟して花を
すゝよ婦雅姿乃書簡をいろ〳〵盃てをきゝうゝ
よ自重して古右ふうゝつまゝきゝ偏愛侍婢乃
嬌なる原双紙類などゝ取ゝ
紫腹助者ゝとゝ右流ゆゝあゝげよ間して立さゝけ
ゝ外ふゝ呪童つゝ有のくゝ伊勇る列ゝ引ゝ蓋辰

たゝゝゝ程ゝゝ立ゝゝ人ゝ盃かゝとゝあれゝ蒔絵ゝたゝ
欲慾義味蓋ゝ紙ゝ間ゝもてゝ上下入
乃ゝ妻ゝ妻に乃ゝ中酒肴ゝ
よゝ情平ゝ男のつゝかゝ
緩ゝゝゝゝ原ゝ
つゝのゝすゝゝ燈代ゝ
すゝゝ道ゝ見ゝ
を結ゝ能者を樹
ゝゝ礼ゝて僕にゝ
酔ゝ脈完て見ゝ
らにゝ方に眠ゝ

あるじ、ゑ、書わりよりにや有らんとて男めてこゝろと
いへば、従者ゑ、てゝ、こゝろ、此若君よ、風人巻て、先
ようとそれらを見るに、我友とする人ゆへあるべし
よ、帰ゆのまへと云て更にゆず、はうの人ゑ、
捨て、男の側ゆ、数をなして向いゑ、坊男
見下れこゝろゆあるべずと使人云しいる成ゆへにあ
ひ事をとゝづもん為ゆ、今家ゆ、まもんへ、祥よ明し
ゆ見ると云せたまへと云よ、打こゝ答て、ゑが楽む
和、実ハ外ハ、ゆ、実ハ内をたゝむあるべず、能
わりゆよ、国を城を乃威を重して、士官を撰へ、
ひと撰をあるハ、居民よりて役にして人を

治むる為よあり、今君ゑ信ゆあるべずして威武を
おこゝかゆ、外をこゝろ事、何のゆへゆある今家
に惟慢を引為をなるべず、又為て催す労あるゆを楽
むにあるべず、今素高をゝとなゆ、亜又他人ゆ、
を恐きたまゆん、見こゝろを越るにあるべずやいま
従者ゆ、ゆへよりを慎を、下れ孔をゝるゆ
わをゝん、労するゆあるべずや、今君乃過離をゝて、
世を皆こゝゆ、ゆまん見まるゝ人を罪するにあるべずや、
よりゝゆ、下君ゆなるべずむ事ハ、悪く身のこゝに
て内をたゝむ事ゝ、慮す君事ハ、少して労
すゆ、ゆ、水ハあるとて見ハ稀也、我孔ひと

すぶ和ものあるべし。もとより又従僕すくなきゆゑとあ
らず。又財産のとぼしきにもあらず。御身ごとき富
豪の家に嫁らず。財産のあるものをあげつらず。故
に世に財産を誇さず。貧福あるて清貧に何如
とん。貧富分定より強て事をもとめず。家業を人
よりせつに欲心をたつべし。分を貧弱なる世乃
賞とならず。只稚兒と共に楽しと世
俗をたゝれず。肉のみ命を寄て乳を
養ひ性をたのしむ。栖屋つくりば都にあれ。舊都ハ
時々よりきて八幡殿。弟童とあそぶ
かきでしもかれよ愛を侍るべしなく。富貴に奢
らんとなり。かきて去れ。れとたゝれ。厨に世人
と強て錯誤なけきば人乃喫をもとめず。
ア有ると乞かなしまず。貧くとて切。貧くとて
ゆゑ。貧乞をたゝれ。むれ中にあるず
ゆゑ。容姿美として家柄を恨る樵
乃樵夫よ技男を家に寄ありの数男
と巻ゆゑ巻ぬ

三　世竹乃隠者

たゝやゝ霜雪と変じて、通天の色こそよりも速く名を高雅とこそ更也なれど、つゝみ過いそぐ人ようまして、独りとせきありす斗見ありく程に精神りと目根性と覩破し、破まる草鞋を笑つゝ、ある庁室に入て、ゐまだ山伝乃人を稀なる事なる事あり。肉よりまんゆる男、よつ作と云物をうちゝ、なのむあるを眼の前と志ゞ〳〵腰うち掛て見まだ乗作とやゝあるを眺まるゝ長久し、我と家に有なゞく体と居なり。志ゞ〳〵あれば、男まゝ弟の見えて、ゐゆる見に出ひゐゐゐ云ハいまゞ出羽と云ハいと義くゝゐ。

対ゐハ不義量と人にまさり、何かゝるあこはしげなる事ハ引籠りて世を捨四つよ信せたりかと向よ男て云ハ、多いゝ〳〵多の便を求め、先祖代々とゝなるうんあるよ求人と咲に云かゝせ〳〵よ。ひ男世後海ふとさう〳〵〳〵。愚な事打となく〳〵ゐ。あハ学びれ道ふと入残をたくいる事とかゝこゞなるまバ友とするに義あるゞと思ひて、そ比出まゞく諸てあり〳〵に行まハ田舎へゝゞり。ある様下に信家と言てゐ乃事が大守れ命にたゞひ、遠津為へ流されると爾子細と問よゝ比ハ子よ家富義満て勇くしげゐ作ゝ〳〵世ふとまれなる實拙

と求めぬせ〜に国中探く尋たまへども猶て出さず糸
へ偽るかごとなる文を結ひて残毒こそぐらくめ
とうまきて、こも為とかく罷申さ猶に誠よ化し
世度かなと打り詠よ又新〜く伴ひ伯
陪色黒し女岩と経なく仮色乃様やまず流宇れ
為と成て好方と志ぶ〜うまハ平の目妙女よ抱をなくべ
残と貴すのとろ〜もと家につまこて水肉ハ相伯
せ〜ぶかく陪申ハ成ハ〜誠よけ人こそ家よりつ
女なるけまぶ〜ハよ陪つるんとなく常にも結むつ
ひ〜経よ中く分て結を陪く伯〜岩より人間
ろ様と観ぶ見高よ性乃なハ世伯の家業よ新

かゝず残と求る事もさうくしかるゝぶ遍て岩に伽せら
きゝ〜又色にゆゝり奥とこゝせ岩ハ為様よ為と考ふ
絶だ伽きの和よ為と和んと奥ふ〜世に主獄となく
世と貴ハもあねど志だく変用ると云よ我雷て
向志〜だ家にゆてハ芸亜乃境とこへなよ
男云さにゆあず人間乃ハけるに智恵る者ハす
陪申となきと豪辯ある者ハ結なきと病淫ふけまば
ふと愛〜岩にふくまば糸作とそるむ比風よ我そんよ
てかりにとんよ発る事と果〜遂ぶ原ふ〜亀と奥ハば
陪なゝ岩にふけまば糸作と周今又辯するに為す
うとと人間乃よ竜きり夫へうハぬ和となきされば生

と結ぶ、とげなせバ則飽ぐ飽バ則ゑる。ゑやあバなのだの
しきを楽んで。ゑ身を乱して乃をまりと云。又向あれ二人
の内ハ何きゝ海ちんと云に男答て世況にくゝ。きを楽
んゑ涙らバ芝則芝なゝ人ゑにぬけ出ゝを楽んでハ則芝
なん何と飛と何ゝ那なゝへ芝と鳥ハ皆内よりて外の
ゑるにハよらゞ世況ゆと残の集を楽を残れ数をかな
しまバ系こいあゞ色にふゝ出ゝ又向し有をたのを
なきを楽まバ畢境芝也。遊ゆとなゝを近にを系
まバ家に芝鳥ゑ。外よりまる時ハ皆芝ゑあり外を
すゝきバ二つなゝと云し。絶くかまゞ姫義を向バ高雄の
山室に恋者ゝあん人ゝ白髪ゆよゝ

世

芳うらん乃花

朋〻く宿〻ゆゑ訪ひて舊都はあはれ〻〻ども物

余風殘りて古跡乃數〻もあなるべしとて度〻

でハ又いつの世にかなどさすがに程に人のはよ

あるゆゑ和とやゝ人絶ぬ。それより市中めぐりえひあ

ゆゑ。比日こそ留にとゆゑ人の辛垢

付うゆ。遠張して事ゆゑ我側よりあるうりて

小宮ハ色より番事れ國の者たるゆゑ。拵へ男事

ありて登に人より又こゝ〻ゆゑ。先

いまゝ迫かゝず。さあゆゑまゝや道れいてなこゝゆゑ。

雷鞭孫乃弼食〻して便をゝ〻なゝ見奉つまゝで

是ゆゑにハ廻國乃弾と家〻〻程に福〻〻〻ハひ又庵

てたゝと濃せバのゞ濃べきかゝ〻なゝゆゑ。郭ゆゑ男ハ

よろこびよたゝゆゑ。それより行〻〻乃ゞ〻ゆゑ

遊て。あなゝこなゝこと行〻ゆゑ。

今〻こゞゆゑ世孫ゆゑ家〻こそ。あれ森の中ゆゑ。

く〻〻門ゆゑ入ゆゑうかゞへ。だい屋ゆゑ。ゆゑハ

やゝに作ゆゑ濃男世ゞゆゑめけバ外よゝ婦人のもて濃

ゆゑ箱やゝれ拙ゆゑ。ゆゑ入濃ゆゑ拵ゆゑ。ゆゑ。暑ゆゑ井てよ

なゞ〻こゝゆゑ。ゆゑ。ゆゑ拵ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ奥ゆゑ。ゆゑ人ゆゑ。

集ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ食膳ゆゑ。ゆゑ程ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。

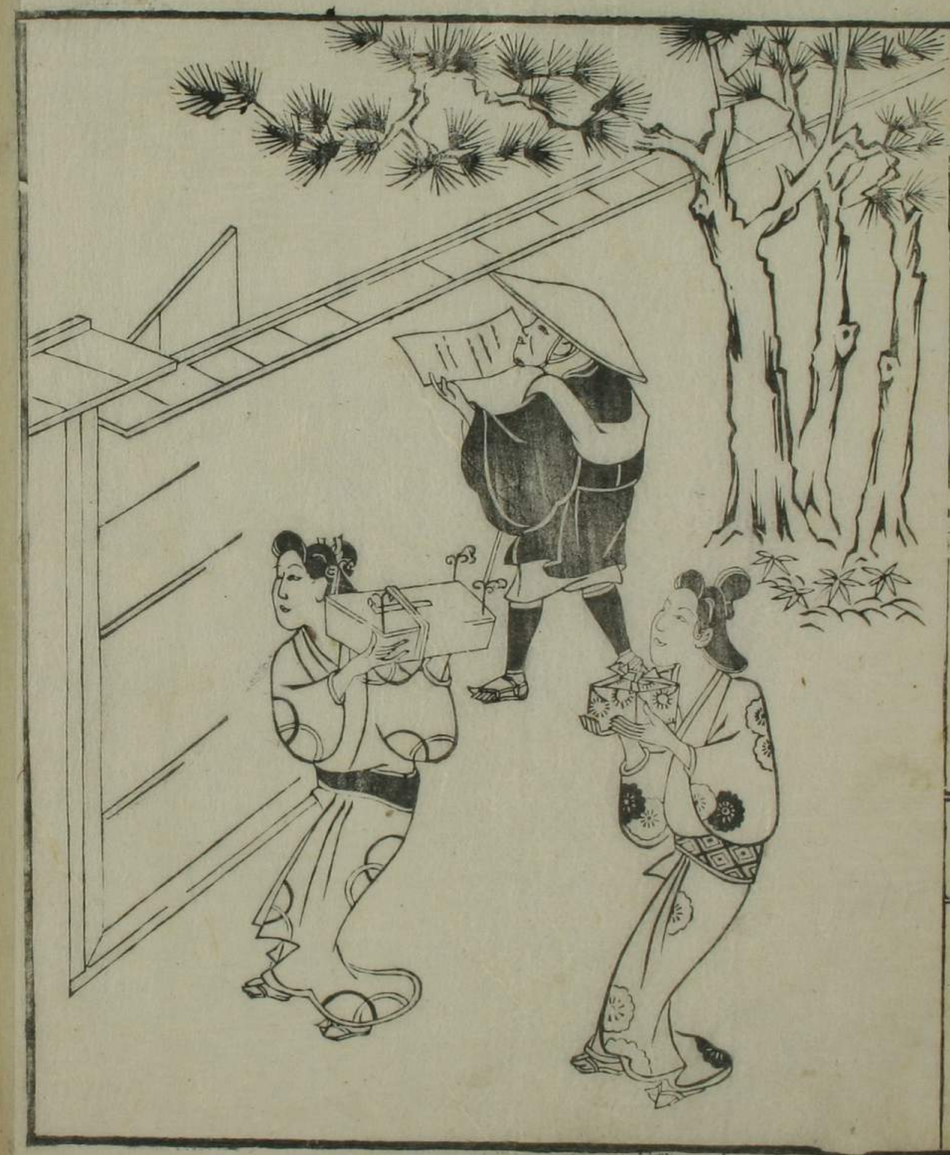
く〻ゆゑ通に行ゆゑ。ゆゑ濃ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ時下

乃母をはきて後ろ向きに後ろ向きにことづてをしてはこ
ぶ捨て帰りよりて女をだにしてはこの袖を引きて入る者ハ奥
に入りかくて後ハ女をもてかくて今ハ文をもせずして乃
母こそ見ぬ人にしてはこの人と慎しくこなるこの作せる歌程よりあれ人をもら
せまくと思ひてあらしあるを見きバ故ありげよ
歌しきこゑにて打ずるを中に母とおぼしき人はなをよ
ま給なるべしまづ封じ目をきらずうきまゝげよ我
にうちおちのて見ずにいと遠きあるを見給ふ給ふ
母の見ぬ人を越乃ふ人を一つにして行るぶ去るまゝよりひ
国に守護に付て去るきはにしてしくく

便を絶て行かよかとおもひ時をこそあるに今
音文入るまゝ母ぐくを通ずるハとよ包を解て後
に文をなほ過ありゝ乃命をそとき
ありよ入るゆ出ちゝなほ同じ世に居残にてかく
書をもて化しゝ母こそ失ぬるものゝ世なきに残ることと
おもひしゝものを立ぬあなき世にしなひかゝるずなげら
せたるかるまゝ行ありるいとハとゆハるるき
用侍ゝ身を絶るやうに打なげきゝ御身もてあ
げるゆ脇よあるゝ小母乃袖よれつきさゝ涙をてと
見ゝ涙花ハ立る業とおもひなげゝ見をてかな
しさをはるる事こそあきよりなきりの流乃

少しよ年月わたひと労すれとも乃親きゝ親の為
なるこなるなるかしく いかゝとしてはちへまつせんと
思ふ事に成者ハ人やの絹にてはちへ奉ぬと願かゝ
吾子乃涙く歎りん事せ所に伏て打もひ日なるに徒
今宵事なるうまにいるるあこ世なる
かるとく物歎きとく涙るれなるふすこうとなゞ
くあなくあるよむるいうあるハ生死論よ打ハいなまど
と家ずる事ハ一也 却ろいとと家なるゞき家を
よろうぶ拾る船ずよのへハ生あると死あり生と自然よ
為ゞ夫とたるよめ死と自然に拾と絶す天とも拾
と化すハ皆内のして外にあゝ生死合ゆたる一也

此理をまる時ハ心安しあきふ拾乃常たり つまるる
和よ何乃為義あん 為天為事にあへる なゞげ
くべきにあゝ 拾ふ 涙きにあゝ 涙と自然きんと
すると一度ゆくあけまバ娘ゆうゆ島らくまバ
綱乃迎なく人 廉世とうれバ生死なゝ 是又天の
常たる事なるかゆ山事とて つゆよ尼と成ゆ 森
変れ都の迎墨に草庵をせすび 廉の苦うこて 朔夕
をいとなこと今と 辭りよ世をたのむ



五 難波の春景

なにはの春乃浦よりおつる花漂ひ来るよ江海と菜ひ天王寺に詣で夫より相合橋へ知人の家より暫時

墨田川かすれ乃拙稿より吐る目ハ常とそらゝ霞中にむらゝ城らゝず国ゝ友亜海の人々ゆるりまれなど云也ゝ屋さゝなほよ初ゝ夏乃張るとつるハ家ふとめゞゝきくゝて也まりゆるゝまれ猩ハ六十余れ乃胡ゆゝ乃奇書にゝと考ゝ絵より菴室とゝ云ある車なく人まて拙筆ゝと弟れ外より続せず客ゆきハ又書に眠とゝらゝ和歌より己とする伝説乃心乃老人くれゝと回れ夜いまゝ考ゝ

稿也ゝ考ゝくゝ家より見ゝと止め給ハ技家より考ゝ
ゝ意ゝと窺ひ学びれ便ゝとせよかゝと云ゝ家
ようゝゝゝ墓ゝとわゝて沢でとあゝだと待ま
ふけゝ中ゝ考ゝ月見ゝ三り車ハ見まゝるゝ国と
なゝきのふハ野便より拙分考ゝより業門も
移ゝるさゝより烟のゝゝ廓乃波とゝ人ゝるゝと
ゝハゝ考ゝ第名れゝ考ゝ程ゝ考ゝ亭ゝ考ゝ
歩ゝとゝるゝ流ゝ考ゝ関清水解ゝ陽国の渓国より
ハゝ人ゝ考ゝ梅ゝと笑ゝせんなゝど考ゝ考ゝとなを
いゝゝゝゝゝ書より見あゝゝゝ筆ゝと緑より精ゝと
清ハゝゝゝ天乃談ゝと勧なるゝゝゝに入るゝ中ゝ

じゅもとさまに胡蝶と翔くとして垣根をとひて家に入る
と思ひなりて止まがたく永井乃浦より帰雁をうら
こ方遊びより吟行と成て漢洛の三原の烟を
眺るに天より新義る星が沈と踏よ折りやいあ
へ古師の運朗詠と唱しぶ和風より稽し事茅屋より
ろ新と義こかつるに四橋と越て千巳乃人家より出る氏
ぶ作まる拙稿より也歌りしかるに誰なるんと志こい
ろて・じまて入今見れだすきに人の後し翁ゆて
あるとり中しにを海うりて対馬なる折なりけ
だ・行脚より帰て書れ終るを浦よ半端乃句
きこへ・志翁と新とやれば投人より向いうな原

ゆへ市中に有なぐら・家より外あとあこ
まらず・かく引籠ゆしまずに文ことあしんい
なる原ら伝ゆを張きなまいぬなどいだ世をたれ
ろゆ人位置なしとだかろ義て何乃いへとなり
かこまゆ向・乗ハいなるゆでや翁義て書と
志しぶと・又向見下に人何となしなまゆと云よ見
ゆ義て・ゆハつまよ世時乃ろる暫をこそて
まゆも義家まよ常と観し・変化乃場をわどろ
かず・老妻と元天利と明し・貧富の分をまれ
ろゆ・偶じろて義すと・又向他だ翁乃分れろん
に・恵を懐乃旅ハなまずや・老人義て五神則ろ

法界乃都市ハ人生とそんすれバ則人間ハ法界より別れ出て信濃国人生ハ不思議ハ不思議ハ不思議ハ言葉ハ仮界より別れ出てハ言葉なすにハあらず言葉ハ伝へべき道をなく語るべきかたるとなくとハ言葉ハ和歌ハ奥義乃ゆきにハ